

---

# 冒険者と姫の物語

デスクランプ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冒険者と姫の物語

### 【Nコード】

N2733P

### 【作者名】

デスクランプ

### 【あらすじ】

爽やかな風が吹き抜ける大地に立つ冒険者は、その翌日に大いなる人生の転機が訪れようとは知らなかった。

湖畔での出会いにより冒険者は理不尽な負債を抱え、たった一回の出会いが一人の人生を大きく変えていくのであった。

この物語は魔法と剣が主流のおとぎの国の物語である。

服装は現代にも通じるが、交通手段は馬が中心の世であった。

## 第1話 出会い

「ふー疲れた」

みごとな馬といっしょに旅人風の一人の男が立っていた。

彼は皮の胸当てを付けており、腰には剣を下げていた。いわゆる冒険者という呼ばれる人達が好んでする身なりである。

男の目前には広大な草原がひろがって、草原の中央を薫風が駆け抜けていく。瑞々しい緑の絨毯が風に合わせて凹凸を繰り返していた。

一陣の風が吹き抜け、旅人の前髪が空気をはらんで舞い上がった。冒険者は精悍な中にも、どこか品のある顔立ちをしている。

「今夜は、あの森で野宿するか」

少し先に、広葉樹の森が見え、湖が広がっていた。

「おつ、もう朝か」

焚き火が消え、白い煙がくすぶっている。

森の湖畔は、たちこめる朝靄で白く霞んでいた。

耳をすますと、様々な鳥がさえずり朝のハーモニーを奏でている。

遠くの間からは、カツコウの鳴き声も聞こえてくる。

男は目をこすりながら、起き上がった。

「うん……」

突如、森の奥から水の弾ける音が響いてきた。

音のする方に用心しながら気配を消して近づいていく。

男の足音は小さく、幽かなものだった。普通の人間ならば踏み進む度に小枝や落葉のきしむ音がするはずだが、この男はほとんど足音を立てず、まるで落ち葉の上を滑るかのように彼は前に進んでいた。

彼の所作から只者でないことが伺える。

森の中は幻想的な雰囲気を醸し出していた。

朝靄のなか木々の葉の間から陽光が降り注ぎ、滑らかな銀の糸が天に伸びているようであった。

深き森の中、ぽっかりと開いた空間に湖があった。

降り注ぐ陽光と朝靄で、水面は幻想的な輝きをたたえている。

湖の中ほどからはつきりとした音が男の耳に届いた。

一際大きな水の流れる音がした。

「なんだ……」

薄靄がたちこめる中、突如として乳白色の曲線に包まれた輪郭が浮かび上がった。

彼はシルエツトが浮かんでいる一点を凝視した。

朝靄が少し晴れてきた。

柔らかな曲線に包まれた造形が目の前に現れてくる。

「あれは……」

白い影は水浴びをする一糸纏わぬ女性の姿だと判るのにはそう時間がかからなかった。

「きもちいい」

女はたおやかな両手で水を掬い、天に差し出すように手のひらをあげた。

水は手の間から滑り落ちて、そのまま全身に降り注いでいく。

水滴が張りのある柔肌に弾け、背中を滑り落ちる。水滴を滴らせた肢体が光に照らされ、キラキラと艶やかに浮かび上がる。

零れ落ちた雫が水面を揺し、彼女を中心に波紋が円状に広がっていく。

静寂な森の中をかすかな水音と小鳥の囀りが響き渡っていた。

「美しい……。しかし、なぜ、こんなところに若い女性が……」  
しつとりと水に濡れ輝く白い背に濡れた髪が、柔らかなウェーブを描いて飾っている。

男の位置からでは後ろ姿しか見えないが、透き通るような白い肌、しなやかな腕、肩から腰にかけてのなめらかなラインだけでも彼女の美しさが推測できた。

朝靄に包まれた陽光に照らされて、水滴に包まれた裸身が光そのものであるかのように輝いていた。

男は数瞬の間、息を呑み声もなく目を奪われていた。

唐突に相手が振り向いた。

淡い光の中に、彼女の美しい稜線を描いた連なりつらが浮かび上がる。透き通るような白い肌に、美しい鎖骨が目をはく。引き締まったウエストから、柔らかなさを保ちながらそれでいて張りのある太腿へと流麗なラインがつつづいていた。

鼻筋の通った気品ある顔立ちは、美しい中にも意志の強さが見て取れた。

「あつ……」

お互いに視線がぶつかって、一瞬の間があった。

「きゃあー」

その女性その体を隠すように後ろを向き、水飛沫と共にそこにしやがみ込む。

悲鳴が朝の静かな森に響き渡り、数羽の鳥が大きな羽音とともに飛び立っていった。

「う、ごめん」

男は我に返って、慌てて身体を反転させた。

背後で衣擦れの音が止まった。

「こつち向いてもいいわよ」

服を着終わってた女は男と向かい合った。

「あなた見たわね私の裸」

「いえ、そんな」

「私の胸の刺青見たわね」

「いや、そんなもの無かったような、あっ」

「やっぱり見たわね」

にやりと笑った。彼女の身体には刺青など無かった。

「私のヌードを見るとは、あなた高くつくわよ」

「そんな事言っても、勝手にそっちが湖で水浴びしていたのであつて……」

「あら、私のものは見る価値がないと」

「いや、何もそんなことを」

「じゃあ、払ってもらおうかしら。早速で悪いけど、ちょっと手伝ってもらっていいかしら」

彼女は、いつのまにか黒装束の男たちに囲まれていた。

覆面の男たちは既に剣を構えて、躍り掛かるうとしている。

「しょうがない、まあ、目の保養にはなったから、協力しましょう」  
「悪いわね。右の五名お願いしてもいいかしら。左の三名は私が何とかするわ。出来れば殺さないでね」

「ちょっと多くないか、しかも注文難しいし……」

「あら、乙女の柔肌は高くつくのよ」

「まだ触ってもいけないのに、しょうがないなあ。まあ、それなりの鑑賞の価値はあったが……」

思わぬ言葉に女は少し頬を赤らめて、剣を構えた。

「さあ、頼んだわよ」

照れ隠しのように叫ぶと、女は駆け出した。

「了解」

二人が話している間に、剣を振り上げた賊はすぐ近くまで迫っていた。

男は相手の突込みを紙一重で交わすと、すれ違いざま黒装束の後頭部に剣の柄を振り落す。

軽い衝撃音とともに黒装束の男は、地に倒れ伏した。

そのままの反動で、鞘ごと剣を前方にいる賊の喉元に突き立てる。黒装束は押し飛ばされ木の根元で意識を失った。残り三人も瞬く間に無力化される。

「よし、こっちは終わった」

「私も終わったわ。お疲れさま」

「襲撃者の腕は微妙だな」

「そうね、襲撃者の目星はつく？」

「あなたの敵なんか俺が知るかよ。ただまあ、暗殺のプロじゃない事は確かだ」

「どおして」

「足跡だよ、足跡。プロはこんな乱れた足運びはしない。極力足音を立てないように訓練する。だから一定の加減で走る癖がでる」

「流れの傭兵かしら」

「ああ、そう見て間違いないだろう」

馬の蹄の音が聞こえてきた。

「姫、あれほど一人で出歩かないでと申し上げておりますのに……」  
騎士が馬上から女に話しかけてきた。

「はっ」

騎士が男がいる事に気がつき剣を向けた。

「この方は、私を助けてくれた方よ」

「こっ、これは失礼致しました。」

騎士は慌てて馬上より降りて一礼する。

「いいよ、気にしてないから。役目だからね」

「そう言って頂けますと、ありがたく存じます」  
騎士がもう一礼した。

「じゃあ、私は帰るから。この人達お願いね」

「はっ」

騎士たちが瞬く間に黒装束を束縛していく。

「さあ、俺も……」

「あら、あなたは私と来るのよ」

「へっ……」

男は用は済んだと思い、去ろうとしていた。

「それに、私の名前を伝えていなかったわね。名はエリザベス、姓はロートブルクよ」

「あちゃー」

男は頭を抱えた。

「俺はルークだ。まさか姫さんだったとはな」

ロートブルグとは今いる国の名前と同一であった。つまり、王女であったのだ。

「か弱い乙女を一人で送り出そうなんて、紳士のすることではないよね。それに、乙女の柔肌は、高くつくと言ったはずよ」

この数奇なめぐり合わせによって、二人の運命は大きく展開していくのであった。

そして、ルークはここに理不尽な負債を抱えることになったのであった。

## 第1話 出会い（後書き）

とりあえず見切り発車します。遅筆ですので月一回更新くらいかな  
と思いますので、ゆるりとお付き合いいただけたら幸いです。  
ちなみに期待するほどのHはありません。あしからず……。

## 第2話 居候

「ルーク様、お茶いかがですか」

「おう、ルネちゃんか、一杯頂こうか」

いつもルークはエリザベスの執務室の辺りをフラフラとしているので、侍女が気を利かせてお茶を入れてくれる。

「なあ、自分で言うのもなんだが、俺みたいなどこの馬の骨とも知れない者を姫様の近くに置いておいていいのか」

「あら、姫様を賊から守った方とお伺いしておりますが」

「そうだけど、もしかしたら狂言かもしれないし……」

「大丈夫ですよ。姫様は人を見る目は確かですから」

「ほう」

「王族の方々には幼少より有象無象の輩やからが擦り寄ってまいります。

腹に逸物持っている者、口ほどに実力が無い者、反対に不言実行の者、誠実な者など様々な人達と接してまいられました。近年はこの城主でもあり王位第一継承者でもあるため大変お忙しい身であります。いちいち全ての人たちと同じように接しては……」

「なるほど、幼少からの経験で一瞬のうちに相手の実力を見分けるすべを持っているという訳か」

「その通りでございます。姫様が信頼なさっているのであれば我々に異存はございません。なにより我々もほとんどが姫様に見いだされて今の職にあるのですから。姫様に仕えている者で幼少よりいらっしやるのは家令のスチュワート様と侍女頭バーネット様くらいですわ」

「ほう、じゃあ、この間会った隊長なども……」

「たぶん騎士長でしょうか、あの方もこの城で門の守備をしていた方です」

「ほう、それは出世だな」

「皆、実力で選ばれてますから」

「そうすると、他の人達に妬まれないか。特に今まで家柄で地位を得ていた者達からは」

「ええ、その……」

「やっぱりあるのか」

「まあ、はい、特に姫様には……」

「ほう、じゃあ襲つてくるのは外国の刺客ばかりではないのか」

「姫様は第一継承者とはいえ、第二、第三位継承者の方がいらつしやいます。その方々はあまり王位に関心が無いのですが、保守派の貴族たちが彼らを擁立しようと思つております」

「じゃ、この間襲つてきたのは保守派の貴族の仕業か。海外の暗殺家にしては少しレベルが落ちるなと思つたから」

「さあ、そこまでは存じあげませぬが。姫様はお分かりかと存じます」

「まあ、難しい事はどうでもいいや。どお、ちょっと街でも散策しない。案内してくれないかな」

「いいですよ。姫様からルーク様のお世話を当面するように仰せつかっておりますから」

「よし、行こう。何時にする」

「今の仕事がもう少しで片付きますので、準備してお待ちください。着替えてまいります」

「いろんなものが並んでいるね」

ルークと侍女のルネは城下町の繁華街を歩いていていた。

「ここは国境を守る城ですから、珍しい物や色々な交易品が集まります。この先に飲食街がありますのでそちらにいきましょう」

「いいねえ、そうしよう」

足を進めるうちに、屋台や店が並ぶにぎやかな場所に来た。

雑然とはしていたが、不潔な印象はない。

甘いにおいが鼻をくすぐってくる。歩きながら食べられるものを売っている屋台もちらほら見られた。

「いらっしゃい、うちのは新鮮だよ」

威勢のいい活気のある声が満ちている。

「この焼き蒲鉾は有名なんですよ」

「じゃあ、おやじ二つもらおうか」

「はいよ、二つで一Gだ」

「じゃあ、お金」

「まいど、熱いうちに食べてよ」

ルークとルネは焼き蒲鉾を片手に、商店街を歩いていた。

「このたこ焼きおいしそう」

「じゃあ買おう」

買い求めて二人は少し歩いた。

「知ってますか。こここの、生フルーツゼリー絶品なんですよ」

ルネがケーキ屋さんのようなフルーツ店を指差した。傍らに休憩できるテーブルと椅子がいくつか置いてある。

「よし、案内してくれたお礼にここで休憩しよう。何でもたのんでいいよ」

「いいんですか」

「いいよ」

ルネが弾むようにはしゃいでいる。

「ここは旬の完熟のフルーツが、甘さ控え目の柔らかい食感のゼリーに入っているんですよ」

「ほう、それは美味そうだ」

店に入ると、ショーケースにはほとんどの品が無くなっていた。あるは生ジュース用の果物だけであった。

ルークたちが訪れたのは昼をかなり過ぎた時間であったのだ。

「ゼリーはもう無いですよね」

ルネがダメもとで店員に聞いてみた。

「夕方の予約のお客さんの為に作ったものがあるから、今なら分けてあげますよ」

おばあさんが、にこにこしながら奥の冷蔵庫からゼリーを出してきてくれた。

「見てください。ラッキーですよ。今日はメロンとさくらんぼがありますよ。いつも売り切れなんです」

「じゃあ、そのさくらんぼとメロンを頼もう。二つづつくれ」

「はいよ、ついでに生ジュースはどうだい」

「じゃあそれも頼むよ」

お店のおじさんが、夏みかんを絞ったジュースを作ってくれた。

「このグラスに入ったゼリー可愛い。それじゃあ、いただきまーす」  
嬉しそうにルネはスプーンを入れていく。

「おいしい」

ルネが幸せそうにゼリーを食べている。

「確かにこのゼリー、生と謳ってるだけあって美味しい。ちゃんと食べ応えのある固さで、しかも食べやすいゆるさ。絶品だ」

「このゼリー中に入っているフルーツ次第で、ゼリーの味が微妙に違うんですよ」

ゆつくりとゼリーを堪能すると二人は帰ることにした。

坂を下っていくと、細工品の店でルネの脚が止まった。店にはランプやかんざし、トンボ玉のネックレス等、如何にも女の子が好きそうな物が所狭しと置いてあった。

「何か気になる物のあったの？」

「ええ、これ良いですよね」

ルネは小ぶりの品のあるバレットを指差していた。金の細い線で華が描かれ、小さな桜色の蝶が飛んでいる。

「親父これくれ」

「いいんですか」

ルネが申し訳なさそうに聞く。

「いいよ、お世話になっっているし」

「はいよ、彼女にお似合いだよ」

店員が威勢よく包みを渡してくれる。

「えっ、彼女なんて」

少し照れていた。

「ところで、その奥にあるブローチは」

「お客さん、お目が高い。これは東の大陸から来たといわれる一品で、嘘か本当か知らないが皇族が身に着けていたという謂れがあるものでさあ。ここの緑の石は本物の翡翠ひすいですわ」

「いくらだ」

「六千Gでございます」

「おいおい、それじゃあ馬車が買えちゃうよ」

ルークが買いそうな気配があったので一気に店主も勝負に出た。

「では、特別に四千でいかがですか」

財布の中身と相談した。姫から多額の褒賞を貰っていたのでお金はあったが、なかなか高いものであった。

「もう一声」

ルークがさらに値切る。

「今回だけですよ。三千でいかがですか」

「まあ、いいだろう」

このような高額な希少品や骨董品はなかなか売れないので、通常、利幅を多めに取ってある。置いておけば在庫品のため、原価は三分の一から十分の一くらいのことも多い。このことをルークは知っていたので交渉したのであった。

ルークは財布から金貨を出す。

「毎度ありがとうございます。今後ともご贖目に」

彼は大切そうに店員から渡された包みをしまっていた。

その様子を不思議そうにルネが見ていた。

## 第2話 居候（後書き）

気まぐれに次話を投稿してみました。このペースで続くと期待しないでください。

### 第3話 猛獣退治

「ほーら、いつまでポーっとしてるの、うちはただ飯喰らいはおいでないの。さあ出かけるわよ」

エリザベスの執務室の一角で、ルークは何をする訳でもなく外を見つめて佇たまたんでいたのであった。

「おおう、人使い荒いなあ。そんな事じゃ婿の来手が居なくなるぞ」  
「あら、この美貌とナイスバディを世間は放っておかないわよ」  
身体をしながらポーズをとる。

「たしかにスタイル抜群なのはわかるが、実際見ているしなあ」  
ルークはにやりと笑った。

「恥ずかしいこと言わないで」

両手ですばやく服の上から胸を隠した。

「うっ、おほん、気を取り直して、さあ、行くわよ」

「どこへ？」

「ちよつと森まで熊さん退治よ。村で被害が出始めてるの」

「まあ、いいでしょう。どうせ暇だしお供します」

二人は木漏れ日の落ちる森の中を歩いていた。

「なあ、念のために聞くけど森のどの辺で出るのか知っているのか」

「えっ、森を歩けば分かるかなとか思ったりして」

彼女は当ても無く森を彷徨っていたのであった。

「おい、おい頼むよ。どうするか」

「まあ、なんとかなるわよ」

「とりあえず、川か湖の方にでもいっくか」

「なんで」

「あのね、動物は水を飲まなきゃ生きていけないの。つまり水辺に集まるのさ。そしてその動物を狙うために肉食動物も集まって来や

すい

「おおーっ、博学」

エリザベスは拍手していた。

「冒険者としては、基礎中の基礎だ」

「だって、私王女だもん。そんな知識知らないし」

彼女は口を尖らせていた。

とりあえず歩いて行くと、水の流れる音が聞こえてきた。

音の感じからすると小川らしい。

しばらく進み藪を抜けると、浅い小川へとたどり着いた。

どうやら豊富な湧水が川を作っているらしく、川底から水がボコボコ湧いており水草が流れにあわせてたなびいている。向こう岸で鹿が数頭小川の水を飲んでいた。

いきなり、一鳴きすると鹿が起き上がり走り去った。

奥の方から草を踏みしめる音が聞こえてきた。

「噂をすれば」

「あっちからよ」

「おうっ」

音が聞こえた森のほうへ注視する。藪から現れたのは巨大な熊のような生き物だった。真っ黒な体に目は妖しく赤黒く光って、爪も青緑に照りが出ている。

「ビンゴ。戦うぞ」

「そうね」

ルークたちは剣を構えて強大な熊に対応した。

巨大な熊はまるで品定めするかの様にこちらを眺めていたが、うなり声を上げていきなり突進してきた。

「はっっ」

ルークはすばやく避けた。

「ちよっつと、逃げてないで何とかしなさい」

エリザベスはあわててその場から飛び退く。

勢いを止めないまま突進した熊は、彼女のいた背後の木を振り上げた手で粉碎してしまった。

ものすごい音を立てて木が倒れていく。

「おいおい、デーモンベアーにしてはちょっと大きくて強すぎないか」

「あれ、言わなかったかしら。デビルグリスリーよ」

「おい、熊って言ったら普通デーモンベアーでしょ」

「まあ、どっちだって似たようなもんよ」

「ばか、えらい違いだ。デビルグリスリーはデーモンベアーの倍の力があって頭脳も狡知に長けているんだぞ」

「あら、そうだったの、これから気をつけるわ」

「おいおい、今はどうするんだ」

止まったルーク達に容赦なくデビルグリスリーは襲い掛かってきた。隙を見てルークは剣で斬りかかるが、グリスリーの爪で弾かれる。

エリザベスは避けるのがやっとで近づくこともできなかった。

「なによあの強さ。出鱈目もいいところよ」

「だから言っただけ。最初から分かっていたらば銛とか弩とかの飛び道具持ってきたのに。来るぞ」

エリザベスが慌てて見れば、すでに熊は突進しようとして身構えている最中だった。

「仕方がない。人前では余り使いたくないのだが……」

ルークの全身が何かに包まれていくのが分かった。

「はあああ……」

ルークが気合を込めて剣を構えると、その何かが剣に纏わり付いていく。

剣が青い炎のように輝き始めた。

グリスリーが手を振りかぶって猛烈な一撃を放ってくる。

グリスリーの腕がルークと重なった。

「あっ」

エリザベスが驚声を放った。

黒い塊が彼女の前を通り過ぎていった。

鈍い衝撃音とともに、なにかが木の幹に突き当たる。黒い毛に覆われたグリズリーの片腕であった。

片腕をもがれたグリズリーからは大量の血が迸っている。

グリズリーはそれでも猛然と突き進んできた。

ルークはひらりとかわすと、グリズリーの背後から剣を一閃する。大きな音を立てて、残りの腕も切り落とされていった。

グリズリーは、しばらくもがいていたが力尽きて倒れていった。

「ふーっ、疲れた」

安心したのかルークは崩れ落ちるように膝から力を失っていく。

「ねえ、大丈夫なの、ねえ」

「ああ、大丈夫、疲れただけだから」

ルークの意識は抜け落ちていき、目の前が暗くなっていった。

「んっ……」

ルークが僅かに身じろぎをする。

木々の葉の間から小鳥のさえずりが聞こえ、優しく吹き込んでくる風は、僅かに花の香りまでも運んでくる。

そよ風に髪をなびかせながら、ルークは深呼吸した。

陽射しが眩しく感じた。

「おっ、何時の間にか、眠ってしまったか」

ルークはしっかりと瞼を開けた。現状が理解できずに固まった。目の前に覗き込むエリザベスの顔があり、後頭部にはなにやら柔らかいものを感じ、視界にはエリザベスの上半身しか見えない。

もしかして膝枕されているんだろうか。ようやく認識してきた。

ああ向けに寝転がったルークの視線と暖かく見つめるエリザベス

の視線と交わり合った。

「そろそろ起きないと」

起き上がるうと頭を起こすが、多少ふらついた。

「まだ寝てて」

そう言っつて再びエリザベスの膝に寝かされる。

エリザベスは微笑をたたえ、優しくにルークを見つめている。

二人はポーッと何をしてもなくただ空を眺めていた。

青空を一切れの雲が漂い、小鳥達の鳴き声や風にゆれる木々の静かな音が聞こえてくる。

「どう、少しは楽になった」

優しい声で労わる。

「なあ」

「なに」

「足しびれないか」

「大丈夫よ、まだしびれてはいないわ」

笑顔で平気そうに言う。

「情けねえ、あれくらいで倒れるとは」

「でも、助けてくれたわ」

「そうは言っつてもなあ……」

考えないようにしてもどうしても後頭部の感覚に意識が行っつてしまっつ。

意識をすると柔らかい感触とほのかに甘い香りもしてくる。

やばい、これ以上負債を増やすのは……。別の事を考えて気を紛らわすことを考える。

「ありがとう」

「……………」

ルークは半端に口を開けたまま、言葉を紡ぐことも出来ずに微笑む彼女を見惚れてしまった。

透けるような白い肌と柔らかく澄んだ眼差し、風にたなびいてい

る髪は金色に輝き幻想的な美しさを醸しだしていた。

ルークは急いで視線を逸らした。彼の顔は照れで熱くなっていた。

「さてと、もうそろそろ行こうか」

「そうね」

ルークが先に立って、土を払って立とうとしているエリザベスに手を差し出した。

「ありがとう」

それを手にとって、彼女も立ち上がる。

「さ、行きましよう」

彼女は歩き出す。

ルークも彼女に合わせるようにして歩き出した。

## 第4話 外交使節

「さあ、お出かけよ。準備してね」

「今度はどこ」

「お隣の国」

「おいおい、外国かい」

「そう、表敬訪問よ」

「で、いつ」

「明日」

「はあつ、明日って唐突すぎないか」

「他の者はちゃんと事前に言っているわよ。どうせあなたは、冒険者なんだから、たいした準備いらないでしょ」

「まあそうだけど、一応、薬とか野宿の準備とかしておかないと」

「野宿の準備は要らないと思うけど、何せ王族の随行よ。高級宿や村長宅等に泊まれるわよ」

「そうは言っても、旅は何が起きるか分かんないから最善の準備はしておかないと」

「まあ、いいわ、その辺は任せるから」

「綺麗なところね。一面黄色よ」

「そうだね、こんなにひまわりが群生しているところは他では見たこと無いね」

エリザベスは馬車の窓を開けて、馬車に併走しているルークと話していた。

「よし、決めた。停めて」

エリザベスが御者に声を掛けた。

「あと、私の馬持ってきて」

廻りの衛兵に命ずる。

「うーん、気持ちいい。やっぱり馬車に籠っているのは性に合わないわ」

道路の片面、見渡す限りひまわりが咲いていた。

日差しは暑いが、爽やかな風が山から吹き降ろしてくる。

エリザベスは長い髪をたなびかせて爽やかな空気を満喫していた。

「ねえ、ところでルークあなた、東の方の出身で言ったわよね」

「んっ、まあそうだが」

「昔の都があつた方？」

「そう、そっちの方だね」

「あの辺りは戦が絶えないと聞いたわ」

「ああ、戦争はしょっちゅうあつたな」

長きに渡る争いは深刻な世情不安を引き起こす。

食料は軍にとって重要なことであつた。『軍隊は胃袋だ』といった言葉があるように、軍にとって食料の確保は大切なことである。

戦は何の生産性もなく、多くの物資を消費していく。

一万の軍勢には一万の軍勢が消費する食糧が必要であり、その中に騎兵が存在するならば食糧の何倍もかさ張る飼葉もまた必要になる。

意外に知られていないのが、塩分補給の重要性である。塩分の補給を忘れると、筋肉中の電解質のバランスが崩れ、痙攣が起こり歩けなくなる。補給を怠ると意外なところで死を招く。

体重七十kgの人が休憩も含めた通常の八時間行軍したとすると、水分が約三リットル蒸発し塩分も十g程度流出する。通常、食事で十g程度塩分を摂取しているが、流出分と差し引くと体内にほとんど残らない計算になる。

一日に兵士一人当たり必要な量は塩十gと米六百gとすると一万人で塩百kg米六トンにものぼる。

海や岩塩が取れる場所があれば塩の調達は容易ではあるが、そうでない場合は多大の費用を要する。

さらに、貴重な金属類を槍、剣、矢に使用する。

このように戦争は人材、資材ともに多大な消耗を強いる。国家は長期の戦争を行うとすぐに財源不足に陥る。これを賄うためには、税を多くするか借金をするしかない。

当然今まで治安にあたっていた兵士は戦場に送られ、農業、工業に従事していた働き手も徴用されていく。庶民の生活に関わる経費は削られ、役人の給料も削られることとなる。その結果、役人は私腹を肥やすようになり賄賂や不正に走り、ただでさえ働き手をとられている農村は高い税でさらに疲弊していく。

治安が悪化することは火を見るより明らかであった。

食料遅配などにより戦場から脱走した兵士や逃散した村人の多くが匪賊化し、政府の力の及ばぬところで無法の限りを尽くし始めたのである。

彼らの無法は当初食うために行われていたはずだったものが、いつしか自らの快樂を得るためだけに行う刹那的なものにならなくなっていった。

特に政府の影響力が弱い辺境は顕著であった。

闇に紛れて野盗たちは村の包囲を完了しようとしていた。

「さあ、宴の始まりだ」

野盗の長は顔を醜く歪ませて薄く嗤った。

紅く燃えさかる炎がそこかしこに見え、あたりから悲鳴や怒号が聞こえてくる。

「そ、それは種籾です……それまで奪われては来年は全く収穫できなくなってしまう……」

「死んでいく人間にや来年の心配もいらんだろうがよ」

野盗に立ちはだかった村長は、一刀両断で斬り捨てられた。

「とつとつ、もらう物ももらつたらずらかるぞ」

蓄えを根こそぎ略奪されていくなかで抵抗する男たちは例外なく殺されていった。

この近辺を荒らしまわつたら、正規軍が出動してくる前に逃亡しなくてはならないのだから村の未来など知ったことではなかった。

そんな村の道を急いで走り抜けようとする一群があった。

中央には馬車が、その周囲には護衛と思われる壮年の騎士とその従卒が数名いた。

煤で汚れてしまつてよく分からないが、名家の者たちのようだ。

前方に簡素な革鎧と粗末な武器を身につけた柄の悪そうな男たちが行く手を塞いでいた。

一人が馬車に気付き、声を上げる。

「オイ、あれ見ろよ」

「金を持っていそうだぜ、殺つちまおう」

斧を腰に下げた男が笑みを浮かべながら言った。

「よっしゃ、まずは馬車の中を見ようぜ」

馬車一行の行く手を阻むと、一気に散開して包み込みはじめた。

騎士の従卒があわてて野盗たちの前に立ちはだかる。

「若を連れて早く。ここは我らにお任せを」

「ご無事で」

「すまぬ」

馬車から降ろした少年を馬に乗せ、壮年の騎士は走り去っていった。

「家族はどうしたの」

「全員死んだな。俺は、知り合いを尋ねて遠くに行く途中だから救

われた」

「……」

「気にするな。東ではそんなに珍しい境遇という訳ではない。俺なんかは、まだいい方さ。軍が非戦闘員しかいない集落を襲ったこともある」

「民族浄化とかジェノサイドとか呼ばれるもの？」

「そう、酷いもんだったよ。他民族の種は残すなと男は見つけ次第殺し、若い女は散々嬲られた末に絞殺。老人は生きてまま油を掛けられ火葬にされた者もいた。戦場に行けばどこにでも大なり小なりある事だけど……」

「人を殺すと言つのは素面すいめんじゃ出来ないから、みんな狂気になっていくのよね」

「狂気は一旦たが箍が外れると暴走する。自分達が駆けつけたときには手遅れだった。うまく隠れたものが数名いただけだった。あまり思い出したくないが、頭は忘れないよ」

「ごめんなさい。いやな記憶を思い出させて」

「いや、いいさ。今は割り切れているから。皆、人のことなんか考えられない時代だったんだ。俺が生き残ったのは運が良かっただけなのさ。でも亡くなっていった人たちの分も精一杯生きなきゃね」

夏の軽装からルークの二の腕が覗いていた。風に吹かれた前髪をかき上げた時、腕に大きな傷跡が見えた。

彼の経験の豊かさと有事の冷静な態度は、一朝一夕に出来たのではない事が感じられた。

## 第5話 王宮

「オーさすがは国賓が泊まる場所だな」

エントランスを入るとドア向こうにリビングダイニング、その奥にミニキッチン、ミニバー、特大のバスルームにバルコニーがついていた。

さらに主賓の寝る場所以外にベツトルームが四つ付いている。付き人用の部屋のような。それぞれのベツトルームにはホテルのシングルルームほどの設備が装備されている。机、椅子、ソファーにバス付きのシャワーまで付いていた。

「きゃー」

「どうした」

ルークがあわてて主賓室のドアを開けて部屋に入った。

「ごっ、ごきぶり」

「なあーんだ、そんなことか……」

彼の視線がエリザベスを捕らえたとたん泳いだことに、彼女は気がついていないようだ。

彼女の意識はゴキブリに完全に向かっていた。

エリザベスは脱ぎ終わったブラウスを胸の前で抱きしめていた。

ブラウスで隠しているとはいえ、横からは桜色の下着がはつきりと窺え、艶やかな肩が剥き出しになり、美しい鎖骨が目を引いていた。

しどけなくブラの肩紐が二の腕に垂れ、生地が肌蹴はだけてとろけるような膨らみが、きわどい所まで露わになっている。

ブラウスで押しつぶされた連なりは、逃げ場を失い今にも零れ落ちそつにまるび出ている。

慌てている彼女の動きに合わせてゆさゆさと悩ましく揺れ動き、

ルークの目を釘付けにした。

目を転じると、彼女の傍らに脱ぎ忘れられているスカートが見てとれた。

ルークはごくりと喉を鳴らした。

柔らかなブラウスの布地からもう一つの大切な部分、繊細な刺繍の施されたチュールレースの薄布が、ほんのり浮かび上がっていた。ルークの位置からだど、きわどく切りあがったシヨーツから、生の太腿が大胆に露あつちになつて視界に飛び込んでくる。

引き締まったウエストから背中にかけて、肌理細やかな柔肌きめが白く輝いている。

絹のレースに縁取られた双臀は、匂いたつような女らしい曲線でムッチリと脂がのつて艶めかしい。

ウエストの絞りこみが深く、逆に豊かに実った官能的なヒップラインが、足首へと流れるようなスタイルをよりいっそう強調していた。

見えそうで見えない姿が、かえって想像力をかきたて欲情をそそられた。

「それより早く服を着ろ。目のやり場に困る。たのむから、これ以上俺に負債を負わせないでくれ。まあ、見るだけなら何度でもいいんだけどな」

「えっ、きゃっ……」

エリザベスは慌てて奥の部屋に入って着替えてきた。

豪華絢爛な大階段を昇つていくと、ライオンの上にまたがった大帝がエリザベスとルークを出迎えていた。

左右には女神像。天井の絵も見事だ。

階段を登つて最初の部屋についた。

「おお、これまた豪華だな」

「あら、ここは衛兵の控えの間よ」

「えっ、たしかによく見ると床は雑なタイル張りだな」

「泊まっていた部屋は、大理石張りだったでしょ」

「廊下の天井や壁の装飾は豪華で繊細だし、さすが大国フロレンス」

ルークとエリザベスが案内されながら宮殿の中を歩いていた。

「さて、今日はどのようなご用件かな。いっいや、エリザベスは娘みたいなものだからいつ来てもかまわないんだが、最近はずいぶん忙しいと思う、用事がないと来ないかなと思ってお」

エリザベスの母の兄がこの王のエドワードであった。そのため彼女は幼少のときより度々この宮殿を訪れて長期に滞在していた。頭の良い彼女を自分の娘のように王は可愛がっていたのであった。

近年、エリザベスは皇位第一継承者であるのと同時に、国境の大きな城を任されているため多忙な毎日を送っていた。

見事な刺繍のついた布張りのソファに上品に腰掛けているエリザベスは、美しい笑みを浮かべていた。

エリザベスに笑みを向けられ、王は優しげな目を返している。

彼女の後ろには、秘書兼護衛という立場のルークが立っている。

話は全てエリザベスが行うことになっているので、暇なルークは、視線だけを動かして屋内の様子を観察していた。

彼女も今日は普通の軽装ではなく、品の良いドレスに身を包んでいる。

「実は隣国のエラムことです。最近、旅の商人たちから興味深い話を聞きました」

「ほー、それは」

「麦を大量に買い付けているとのことですよ」

「それは……」

「それと呼応するように、私の国内でも不穏な動きがございまして」「うむ、こちらも十分注意しよう。至急情報を集めるとともに、そ

ちらにもお伝えしよう」

「ありがとうございます」

「まあ、せっかく来たんだ。難しい話はこれくらいにして、お茶でも飲んでゆっくりしていこうじゃないかリズよ」

「はい、おじ様」

たおやかな指で優雅にカップを持ち上げ王に礼を述べ、紅茶に口をつける。

にこやかな笑顔とともに二人の談笑は続いていった。

## 第5話 王宮（後書き）

私事で忙しく、申し訳ございませんでした。ようやく続きを書けるようになりました。今後ともよろしくお願いします。

## 第6話 雨中の逃避行

「ちっ、雨か」

ぽつりぽつりとルークの頬に冷たい感触を残していく。

「やばいな、大降りになるな」

ルークは騎上で、着ていた旅装の撥水コートのフードを上げる。いつの間にか前が見えないほど嵐になっていた。

「早く止まないかなあ」

護衛の騎士がぼやいている。

「おいおい、もつと緊張感を持って……」

鋭い音とともに一本の矢がルークの目の前を過ぎていった。

「敵襲っ、各自散開、あと隊長いるか」

ルークが指示を出す。

「はい、こちらに」

「護衛のうち十名を姫の専属に付けてくれ、それと後ろの文官達にも三名づつ頼む。残りは展開しながら索敵してくれ」

「はい、かしこまりました」

ルークはまだ敵の総数を把握できていなかった。

「ルーク様、予想以上に敵数が多いです。しかも手練れが揃っております」

「散開させたのは迂闊だったが、いまさら言っても仕方がない。なるべく協力して敵にあたれ」

「はっ」

エリザベスも遅い馬車から、ルークの馬に飛び乗った。

嵐の中追っ手に追われて、森の中を長距離逃げ続ける。

ルークは護衛役として騎乗だったので撥水コートを身に着けていたが、彼女は馬車の中での軽装そのままだったので、びしょ濡れであった。

彼もその他の護衛も、いきなりの襲撃で彼女の服装に構っている

余裕は無かった。敵を排除しながらとにかく逃げるのに精一杯であった。

以前の賊のような襲撃者と違い、統率の取れた特殊部隊のようであった。

護衛の騎士も防戦に追われ、エリザベスから一人また一人と離れていく。

いくらおてんば姫とはいえ雨中の行軍訓練をしている訳ではないので、今回の逃避行は彼女の体力を確実にに奪っていった。

ルークが前に乗せた彼女に話しかける。

「どうやら、追っ手からは逃れたようだ」

「そう……」

「おいっ、どうした」

安心したのか姫は力なく倒れて、彼にもたれ掛かっていった。

「おい、おい」

彼女は疲労と寒さでほとんど意識を失っていった。

「おい、どうした」

ルークが彼女を揺すりながら起こそうとしている。

彼女の全身は震えており、唇は血の気が失せていた。

「まだ、暖かいな、これが冷たくなると最悪だな」

彼は彼女の額に手を当てて温度を確かめた。

「おっ、いいところに洞穴がある。ここで少し休むか」

彼女を鞍から落ちないようにして馬から降りると、荷物を降ろした。

彼女の膝裏をかかえて背中からウエストへ腕を差し入れ、そのまま九十度回転させ抱き上げる。

「これぞ、正真正銘、お姫様抱っこてか……。まあ誰も聞いていないか」

彼もどこか不安なのであろう、独り言をぶつぶつと言っている。

「悪いが、適当に走り回っていてくれ。用ができれば呼ぶから」

馬の尻を軽く叩いた。

「ひひいん……」

馬が嘶いなき走り去っていった。長年の付き合いで馬とはかなりの意思疎通が可能であった。馬がいると見つかる可能性もあるので、その場を外してもらったのであった。

「さて……」

洞窟の中に向かう。

地面にコートを敷き、そっと横たえる。

「おっ、都合がいい」

洞窟の入り口附近に乾いた枝葉が溜まっていた。

入り口付近に枝や葉を何度か往復して奥に持っていく。

集めた枝や葉に火をつけると、彼女の様子を確認した。

「ちよつと、まずいな」

彼女は震えが弱くなってきたており、手足が冷えている。

「どうするか……。まずはと……」

彼はこぶし程の石を拾って火の近くに置き、馬に付けてあった防水布に包んである簡易の宿泊セットを持ってくる。手には毛布とタオルとサラシ布を持っていた。

「ごめんよ、まあ、二度も三度も一緒だよな……」

彼女の長く美しい黒髪がしつとりと濡れて頬に張り付いている。

雨水の滴る髪をタオルで丁寧にふいていく。

「さてと、次はこの服か」

彼女にぴったりと張り付いた上着を、剥ぎ取った。

水に濡れたブラウスが、肌にぴったりと張り付いていた。

透けたブラウスからは下着がありありと窺える。彼女の露わになった美しく豊満なボディラインに、生唾を飲み込んだ。

彼女のブラウスに手をかけると、ボタンを一つづつ一つづつ外していく。彼女の体を動かして腕からブラウスを抜いていく。

胸を覆い隠している下着が彼の目に大きく立ちはだかった。軽く触れてみると水が押し出されてくるくらい濡れていた。

「こっ、これも取らなきゃだな……」

許しを請うように留め具に指をかけて外していく。

「次は下か……」

エリザベスの脚を持ち上げながら、水を含んで張り付く布地を苦  
勞して脱がしていった。

彼は一瞬固まった。

「こつ、これもだよな」

最後に残された股間を被う薄い布きれを、その場に跪き両方の手  
を彼女の細い腰へと差し伸べた。

指先でシヨーツの端を摘んだルークは、ひとつ大きく息を吸い込  
み少しづつゆっくりと下げていった。

太腿までできた儂げな薄い布を両サイドから指を入れ直し引きあげ  
るようにして脱がしていく。

彼女の脚が指の位置にあわせて持ち上がったいく。

「さてと、ちよつと悪いが脚を少し開かせてもらおうよ。言うておく  
けど仕方が無いんだからな……」

火の近くにおいてあった手で持つには少し熱いくらいの石をサラ  
シ布で包んで股の付根に置く。あと二つほど石を取り出し彼女のそ  
れぞれの脇に同じように置いた。

彼女の体を少し動かし背にタオルを敷き体の上から毛布で包んだ。

「では、この服を乾かしますか」

大きな目の杖を火の回りに挿して、物干し代わりにする。

「なんとも華やかな、ちよつと目の毒のような光景だな」

焚き火の周りには、シルクのフリルのついたブラウスをはじめ彼  
女の素肌に身についていた可憐な布が干されていた。

火のはぜる音が辺りに響いている。

バチツ、一際大きな木の爆ぜる音がした。

「おう、あぶない。寝てしまうところだった。さてと、服は乾いた  
かな」

彼は干してある服を確認していく。

「うーん、これはまだ駄目か」

ブラは生地が厚いため、まだ濡れていた。

「じゃあ、ブラウスとこれを着せて、石も換えるか」  
毛布を剥がすと、一糸纏わぬ姿の彼女が現れる。

「あいかわらず、神秘的なまでにきれいな身体だなあ。言っておくけど緊急事態だからやむ終えずやっているんだからな。いいか、スケベ心で見ているわけじゃないぞ。そりゃあ、まったく無いとは言い切れないが……」

彼は独り言を言いながら作業を進めていく。

「まずは、脚から穿かせてと……」

彼は喉を鳴らした。目の前の魅惑の肢体を改めて凝視して止まっていた。

「いかん、いかん。さて、脚を通して、少しお尻を上げてね……」  
ショーツを穿かせると、ブラウスを彼女の腕に通していきボタンを一つ一つ填めていく。

「これぞ、男のロマンと言うのも分かるような気がする」  
ブラウスに形どられた乳房の輪郭とポチツと尖っている。はみ出した太ももから目を離せないでいた。

ルークは焚き火の前で、うつらうつらと舟を漕いでいた。

「きゃーっ、なによ、この格好」  
起きたエリザベスに思いつき殴られていた。

ルークが次に気がついたときには、エリザベスの膝枕の上であった。

「ねえ、さつきはごめんね。助けてくれたんだよね」

「ああ、まあいいよ、役得があつたからね」

「今回は、これで許してあげるわ」

「いてっ」

エリザベスは頬を紅く染めて、ルークのほっぺをつねっていた。

第6話 雨中の逃避行（後書き）

遅れた分だけ、少し挽回します。

## 第7話 新たな助っ人

「ちょっと、休憩しましょ」

「あの公園で一休みするか」

大きな整備された公園に向かった。

フリーマーケットや大道芸がそこかしこで行われていた。

大雨の逃避行より一週間が過ぎ、すでに領内に戻っていた。

「さあさあ、寄ってらっしゃい、見てらっしゃい。種も仕掛けも無いこの小さな球、ここで呪文を唱えるとアール不思議。赤と青のボールが宙に浮き始めました」

「おー、すごい」

「そこのお兄さん、何かしていると思うでしょ。ほら手を後ろに持っていてこの通り」

両手を後ろで組んだ。

「おー、おー」

周りの観客から拍手が起きる。

「ねえ、ねえ、あれはどうなっているの」

エリザベスがルークに聞いた。

「珍しいな、たぶん、あれは風の魔術師だ」

「えっ、風の……」

「そう、風だ。火や水の属性の魔術師はけっこう居るが、風はめったに居ないからな」

「そうね、火や水だと生活にも役立つから、よく見かけるけど風は始めて見るわ」

「風は火と水をマスターしてからじゃないとできないんだ」

「じゃあ、エリート？」

「そう、風が使えると言うだけで、たぶん仕官の口には困らないと

思っ」

「じゃあなんで、こんなところで大道芸をしているの」

「さあ、そこまでは……」

「さあさあ、お客さん、ついでにこんな事も出来るんですよ」

男は懐から鳥のおもちやを取り出すと、ぱっ、と宙に放り上げた。鳥が空から落下し始めると、地面すれすれでいきなり浮上、羽を広げて観客の周りを周回しはじめる。

「鳥さんが空に飛んでる」

子供が喜んで指差している。

「じゃあお嬢ちゃんにサービスしてあげよう。ちゃんと怖がらずにまっすぐ立っていてね」

男は言うや否や、女の子の頭に指を置く。

「えいっ」

子供が指に吊られて浮き始めた。

「えっ、どうして、浮いてる。ママ、ほら、空飛んでるよ」

「もう一つサービス。ほら」

子供が男の頭の上まで浮き上がってきた。

「わー、遠くまで見える」

「いかがでございますか皆さま、お気に召しましたでしょうか」

「おーすげえ、始めて見た」

「ほんと、どんな仕掛けがあるのやら」

観客が次々にコインを前においてある帽子の中に投込んでいった。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

「それでは今日はこのくらいにして、はい、終了」

ゆっくり子供が降りてきた。

「おじちゃんありがとう」

「どういたしまして、これ協力してくれたお礼だよ」

男は女の子に棒つきの飴をプレゼントした。

「ありがとう」

「どうもありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます」

「ばいばい、おじちゃん」

母親が挨拶して、娘は手を振って去っていった。

「できれば、お兄さんと呼んで欲しかったな」

親子ずれが去っていく後姿を見ながら男は独り言をつぶやいていた。

「よう、あんちゃん。やるねえ、あんた風使いだろ」

人々が去つたのを待つてルークが男に話しかけた。

「よく、分かりましたね」

「まあな、色々旅していると詳しくなるのさ。ところで風使いの中でもあそこまで緻密に風をコントロールできるってことは、あんたかなりの使い手と見たが……」

「いやー、それほどでは」

男は、ばつが悪そうに頭を掻いていた。

「ところで風が使えるながら、こんな事については失礼だが大道芸まがいのことをやっているんだい」

「まあ、こちらは本職ではないんですが、本業は薬師でして、山で取れた薬草を精製して薬にして売りに来てます。これをやっているのは、けっこう余禄になるので」

「それにしても、あなたほどの実力があれば山奥に住まなくても仕官する先はいくらでもありそうなのに」

エリザベスが話しかけた。

「いやー、若気の至りでして、もう亡くなった宮廷魔術師のダーン様に真つ向から齒向かったことがございまして」

「あの魔術師の神と言われた」

「まあ、一般的には神なんでしょうが、我々から魔術師側から見ると余り故人の悪口は言いたくないのですが、独裁者と言いますか……私の行く先々で私を雇うなら今後魔術師を派遣しないと各城主を

脅す始末」

「それで干されちゃった。という訳か」

「お恥ずかしいことながら。今はしがない薬師でございます」

「特技と言えば、これくらいの事しかありませんが」

男が軽く指を動かす。

エリザベスのスカートが風をはらんでふんわりとたくし上がった。

「はっ……っ」

そこにはなんとガーターベルトに吊るされたストッキングと、総レースの桜色の小さな下着が丸見えになっていた。

絶妙の加減で、まくられたスカートはもはやエリザベスの臀部を覆う役割を完全に放棄して、彼女の大事な部分をほとんど露わにしていた。

ガーターベルトのすき間からむっちりとした白い太腿が覗き、適度な膨らみをもった真っ白な双臀が白日の下にさらされた。

ほんの二、三秒だったが、一瞬も目を離すまいと集中していた二人は、じつくりとエリザベスの生尻を堪能することができた。

「きゃっ、なによこれ」

エリザベスは両手であわててスカートの裾を押さえた。

「ありがたや、ありがたや」

二人は手を合わせてエリザベスの臀部に向かって拝んでいた。

そして、ルークはくると風の魔術師のほうを向くと、

「いやあ、よかったよ。なかなか優れた技だ、しかし、相手を間違えたな、ご愁傷様でした」

ルークが男に手を合わせ深々と合掌した。

それを待ちきれないかのようにエリザベスが何とも言えない形相かたちで睨んできた。

「見たわね」

「はっ、はい」

男は脅えながら答えた。

「代償は高くつくわよ」

「あーあ、俺、知らねー」

ルークはよそ見して、口笛を吹いた。

「あなたは、どこの国に住んでいるの、家族はいるの」

エリザベスがかなり強い口調で詰問する。

「この国に住んでいます。親戚一同ここにいます……」

彼は話しているうちに背筋に冷たい嫌な感じがした。

「かわいそうね、良くて全員禁錮ね。まあ、悪ければ皆、明日から土の下よ」

姫が勝ち誇ったように腕を組んだ。

「私の名を知っている」

「いえ」

「エリザベスよ。ちなみにこれ家紋」

短剣の柄を見せると、百合の紋章が描かれていた。

「えっ……」

あまりの事に絶句した。自分のしでかした事の大きさに頭を抱えた。百合の紋章は誰でも知っている王族の印しるしであった。そしてこの家紋は許可無く使用した場合は罰せられる事になっていた。

つまり、真正銘の王家の証拠であった。

彼はいいところの商家の娘くらいに思っていたので、まさか王族に手を出したとは思わなかった。

冷や汗が全身から流れ出て、足をふらふらとさせながら一瞬逃げようとした。

エリザベスが軽くルークに合図を送る。

「こら、さっきの威勢はどうした」

ルークにがちりと肩をつかまれていた。

満身創痍の彼はその場にへたり込むしか無かった。

「どう、私に従う気ある。そうしたら家族の安泰、考えてあげてもいいわ」

「もっ、もちろんです」

「よし、決まり。じゃあ城まで一緒について来なさい」

ルークは後ろを向いて『ご愁傷さま』とつぶやいた。

「いやー、仲間ができてうれしいよ」

ルークはすこぶる機嫌が良かった。

後年、風の大魔導師として名を馳せた男との出会いであった。

## 第8話 舞踏会

衛兵が恭しくドアをあける。

一歩進むと華やかに装飾された見事なホールがあらわれた。

ところどころに色とりどりのブーケが飾り立てられ、芳しい香りを放っている。

ホールの中は人々によって埋め尽くされていた。

皆が集まっているホールは城内で最も広く、最も高い天井を誇っていた。天井は白地に金で装飾が施され、中央には豪華なシャンデリアが輝いている。

着飾った紳士淑女が笑いさざめいていた。

貴婦人たちがドレスの裾を翻すたびに大輪の花がふわりと開いて咲き誇り、彼女たちのドレスは大きく開かれ、胸元にかけての魅惑的なデコルテラインに紳士達のさりげない視線を集めていた。

競うように淑女達からは華やかな香水が匂い立ち、彼女たちの軽やかな動きとともに男達の鼻腔をくすぐっていく。

楽隊の奏でる華やかなプレリュードとともに、王女入室の先触れが侍従官よりあった。

客達は一斉に中央の絨毯に沿って道を開ける。

扉の両側に立っていた兵士が恭しく頭を垂れると、扉の軋む音がした。

全員の視線が、扉の方へと一斉に向けられる。

扉が開き、真紅の絨毯の上をエリザベスが颯爽と入ってきた。

彼女は一度立ち止まった。優雅なしぐさで、来場者に礼をする。

おてんば姫とあだ名されてもさすがは王位第一継承者、華麗なドレスと相まって気高き品格を滲ませていた。そのまま中央を進み一段高い所にある金に縁取られた深紅の椅子の前に立つと皆に一礼した。

「ようこそ、皆様お運びくださいました。今宵は心ゆくまでお楽し

みくださいませ」

盛大な歓声に迎えられた。

立場の高そうな紳士淑女が列を成し王女の前に並ぶ。

「ビューゴ様、ようこそ」

「お招き頂きありがとうございます」

「こちらの方は、クリル国大使でございます」

「歓迎いたします」

「高名な王女様にお会いできて光栄に存じます」

「こちらこそ、物理学の大家にお会いできて光栄ですわ。いつかフオトンのお話をお伺いしたいものです」

「恐縮いたします。私のような端くれの研究者に王女様にお話できることは何もございません」

「まあ、ご謙遜を先生の『原子の間をつなぐもの』は読ませていただきましたわ。大変興味深いものです。偉大な科学者にお会いできて今日は幸せですわ」

「ありがたきお言葉、拙著をご覧いただくなど、わが生涯にこれほどの栄誉はございません」

何人かの来賓の挨拶が終わるとエリザベスは席に着いた。

宮廷楽師達が音楽を奏で、談笑の時間がはじまる。

周りを気にしながら、ルークが近づいてきた。

「よう、よくフオトンなんか知ってたじゃないか。あのおやし感激していました」

ルークが小さな声でエリザベスに話しかける。

「あたりまえでしょ。来賓の特技、趣味、趣向は徹底的に調べるわよ。そして毎日頭に叩き込むのよ。内容が解らなければ専門家を呼んで集中講義よ。それが外交なの」

「おー、どつりでお誘いが掛からないはずだ。さすが第一継承者」「どっかの極楽トンボとは違うわよ。私が自由にさしてもらえるのも、こつゆつ事をきちつとしているからよ」

「えー、俺やだよ。めんどくさいもん」

「ねえ、そこをお願いよ」

「踊りとか、かつたりいし。貴族のお嬢様や奥方様と『左様でございますね。おほほほほ……』なんて会話についていけないよ。それに城の中だったら、凄腕の近衛騎士が沢山いるだろう。俺が出ていく必要も無いだろうに」

「そうだけど、ちょっと情勢が不安定なのよ。そうね、成功報酬って言うことで、終わったら口でしてあげるといのはどうかしら……」

妖艶な仕草でエリザベスは、ルージユに彩られた唇をゆっくりと舐め回していった。

潤んだ瞳で誘うように、まつ赤な舌先で唇をチロリと舐める。

濃厚なフェロモンが漂い、艶なまめかしい雰囲気があたり一面を支配していた。

つい先ほどの態度とはうって変わった艶美な表情に、ルークは一瞬ドキッとした。

これほどの美女にねだられるのも悪くはない。そう思わせる何かがあった。例えそれが罠と分かっているとしてもそこに飛び込んでしまう男の悲しい性さがであった。

ルークが喉を鳴らし、一も二も無く頷いた。

「本当に口でしてくれるんだろうな。よし、やろう」

「OK、これで契約成立ね。うふふ……」

エリザベスは白いイブニングドレスを身に纏っている。さすがは王族、その姿勢は自然体そのものだった。

彼女はホルターネックのVゾーンが露わな、背中もざっくり開い

たドレスを着ている。艶やかな柔肌を無防備にさらしていた。

ルークの立っている位置からは、まるやかな胸のふくらみがよく分かり、彼女のスタイルの良さを改めて感じていた。

差し出されたルークの右手を見て、エリザベスも右手を差し出す。するとそれを見計らったように新たな音楽の演奏が始まり、ルークはエリザベスの腕を引く。

「なかなか上手じゃないの」

「それはどうも。必死に練習した甲斐があるってものだ」

最初の一曲だからか、ややゆっくりとしたテンポの曲に合わせてルークはステップを踏んでいく。時折立ち位置を変えつつ、優雅にターンを繰り返し踊り続けた。

彼はなんとか一曲踊りきってエリザベスに軽く一礼した。それに対して、エリザベスも微笑んで応える。

軽く息をつくとき、次の曲が始まるまでに次の相手を見つけるために周囲へと目を向けた。

ルークは待つ必要が無かったようだ。ご婦人方や多くの令嬢が熱い視線を送ってきていた。その中でも一番身分が高そうな令嬢が寄ってくる。

「一曲お願いできますか」

「喜んで」

相手を変えながら踊ること三十分少々。さすがに疲れを感じたルークは、軽く休憩を取るべく壁際に置かれたテーブルの元へと移動する。

さりげなく壁際まで退いたルークは、舞踏会の様子を所在無げに眺めていた。

「あー疲れた疲れた」

そう言っつてルークは額に浮いた汗を軽く拭い、隣のテーブルに置かれていた手近なグラスを手に取って、よく見ないで一息にグラスを傾け飲み干した。

「うお、これは……」

「ルーク様、それは、火酒と呼ばれているテキーラでございます。竜舌蘭と呼ばれる少しアロエに似た感じの植物の根というか、芯の部分を使い蒸留して出来たお酒でございます」

「なかなか、きつい酒だな」

「はい、お飲みになった後、お塩とこのライムを少しお齧りになるとよろしゅうございます」

ルネがお皿を差し出してくれた。

喉が渴いたところで飲んだせいか、やけに味が残っていた。塩を含んでライムを齧ると口の中が爽やかになっていった。

「ありがとう、なかなか面白い飲み方だね」

「お気に召しましたか」

しばらくルネとたわいも無い話をしていると、不意に大きな音がした。

最上部にはめ込まれたステンドグラスが、頭の上から降り注いできた。

「きゃー」

「なんだ、どうした」

貴婦人達が逃げ惑い、紳士たちは突然のことに呆然と立ち竦んでいた。

棘の付いた鋼鉄の手甲を付けた多数の侵入者が現れた。

「近衛兵急げ、来賓の方々の前へ出よ」

近衛隊長が叫んでいる。

そうしている間にも、手甲を捨てて黒装束の男達が襲い掛かってくる。

どうやら分厚いガラスを割るために、簡易脱着式の手甲を着てきたようだ。

「どうぞ、王女様」

にこやかにエリザベスに微笑む。

ルークはスマートに手を差し出してホール中央へエスコートする。ルークがオーケストラの指揮者に合図を送った。

さすがに宮廷奏者たち、動揺していた者たちも席に着き、何事も無かったようにゆったりと美しいメロディを奏で始めた。

中央に立ち来賓の方々に一礼すると、曲にあわせて優雅に踊り始めた。

二人のステップは息が合い、流れるような足運びがテンポよく続く。周りは一斉に注目し始めた。

二人が寄り添うようにワルツにあわせてステップを運んでいく。軽やかに舞い、華やかに進んでいく。

曲が終わり揃って一礼すると滝のような拍手が続いた。

「さあ、ちよつとした余興がございましたが、みなさまパーティーは始まったばかりですわ。今宵は存分にお楽しみください」

いつの間にかホールは綺麗になっており、花も生け直されてグラスを持ったウェイター達が揃っていた。

それぞれが我に返ると、お互いにパートナーを見つけ踊り始める。パートナーをそれぞれ替えて何曲か踊るとパーティーはお開きとなった。

「ありがとう、助かったわ。あなたのお陰よ」

舞踏会も終わり、ベランダにもたれ掛かり涼んでいたルークに声をかける人物が一人。

その声を聞いたルークは、向き直る。

彼女に微笑んで首を横に振った。

「いいや、君の曰ごろの行いさ。良い人材を揃えている。オーケストラや給仕の人たちも肝が据わっているからね。あの場面で何事も無かったかのように振舞え……」

言葉の途中でいきなり視界いっぱいになりエリザベスの美しい顔が広がり、次にルークの唇に柔らかな感触があった。ルークの唇にエリザベスの唇が重なっていた。

舞踏会の侵入者たちは、近衛とルークたちの活躍により瞬く間に鎮圧されていた。

無限に感じられたが、ほんの一瞬の出来事であった。静かに彼女の体温が離れていく。

「朝の約束覚えている？」

「あつ、口で……ええつ……これで終わり……」

「いつ、一応わたしのファーストキスなだけ……」

今まで見たこともない俯き加減の上目使いで、消え入りそうな声で囁いた。

少し気恥ずかしいような表情で、頬をほんのりと染めている。

二人の間に不思議な空気が漂い、お互いに見つめ合っていた。

ルークは予想もしない彼女の可愛い仕草に意表を突かれて止まっておろ、エリザベスは気恥ずかしさの余り固まっていた。

「君のファーストキスを頂けて光荣だよ……」

今度はルークが彼女を抱き寄せて、熱い抱擁を交わした。

いきなりエリザベスに突き放された。

「ちよつと、ドサクサにまぎれて胸まで揉まないで」

「いいじゃないか。ここは一気に……」

「あら、ルーク、いいけど高くつくわよ。それでも良いかしら」

「……」

「じゃあ、今の胸揉み貸しにしておくから、よろしくね」

悪魔のような笑みを浮かべてウインクしていた。

「うおー、なんでこんなロマンチックな状況で、借財を増やしているんだ。この世に神は居ないのかあー」

ルークは夜空に向かって叫んでいた。

「こんな美人に出会えて幸せ以外の何ものでもないでしょ。神様に感謝しなさい……まあ、いいわ今回だけよ……言っとくけど、あく

「までも今回だけよ……」

エリザベスが目を閉じて静かに顔を差し出す。

「きれいだよエリザベス」

顔がゆっくりと近づいて、唇と唇が合わさる。

お互いの想いを確認するように深く唇を合わせ、舌を重ねあう。

「んふう……」

鼻へ抜けるような彼女の甘い声が微かに洩れた。

ルークはエリザベスの髪に手を差し入れる。

無骨な指が絹のような髪の間を滑り落ちていった。

エリザベスがかすかに身震いをする、ルークはさらに強く彼女を抱き寄せる。

エリザベスはほんの少しためらいながらも、彼の腰に手を回していった。

ぴったりと押し付けたお互いの身体から鼓動の響きが伝わってくる。二人の鼓動が重なり溶け合ってしまった。

爽やかな夜風がベランダの二人を包み込み、満天に輝く星達<sup>またた</sup>がまるで彼らを祝福しているよう瞬<sup>またた</sup>いでいた。

## 第9話 農学者の独り言

「これは、いい、うむ」

男が土をこねて太いひも状になったものを曲げると、手からぼろぼろと土が落ちていった。

「ここは最高だ、森の近くで落ち葉も多いのがいいのかもしれぬ」  
ぼさぼさ頭の男は、ぶつぶつと独り言を呟きながら歩いている。  
時折、土を拾い上げては、こねていた。

「さて、今日はちょっと馬で遠乗りでもしない」

「いいねえ、今日は天気も良いし」

「えー、俺あんまり馬、得意でないし……」

「大罪人のエロ魔術師は文句言わない。つべこべ言わずについてくる。それとも……」

「はいはい、どおせ俺には選択権はないですよ」

エリザベスに容赦のない言葉を掛けられ、エリックはしゅしゅついていくことにした。

「あの人、このあいだも、あそこにいたね」

「そう言われれば」

「なにをやっているのか聞いてみるか」

馬から降りたルークが、男の下に走り寄った。

「おーい、おじさん、何してるんだい」

「うん、見れば分かるじやろ。土を見てるんじゃない」

ぼさぼさの髪の毛の男は、ルークの顔を見ずに土をいじりながら応えた。

「土を見て何か分かるのかい」

「そうじゃな、土は万物の母じゃからな、色々なことが分かるぞい」  
「ねえ、ここの土はなにか特別なの」

エリザベスが会話に混ざってきた。

「特別というか、ほかの場所と比べると野菜の育成に最良と言った方がいいかな」

「どこが違うんだい」

「野菜作りで土の役割はなんだい」

「栄養？」

「そうじゃな、しかし正解には少し足りない」

「少し足りない？」

「土には養分の貯蔵と供給が一つの役割じゃ。あとは水と空気の貯蔵と供給じゃ」

「水は分かるけど、空気？」

「そうじゃ空気だ。植物は根で、土から養分・水分を吸収する。そのとき、エネルギーが必要じゃ。このエネルギーは、まず日の光で葉がつくったでんぷんを根に送り、根は土から吸い込んだ空気とでんぷんを合わせてエネルギーとするんじゃ。空気が不足すると根は窒息し、やがて腐ってしまう」

「へー、だけど土の中に空気なんて、いっぱいあるもんなの」

エリザベスが男に問いかける。

「野菜を作るとき、鍬で畑を起こすじゃろ。あれは土を柔らかくして根が成長しやすくするんじゃが、空気を土に混ぜ込むためでもあるんじゃ」

「だけどここは、少しも耕していないよ」

エリックが問いかける。

「土を触ってみるがいい」

エリックが土を掴んでみた。

「えっ、ふかふかだ」

「そうだろう、これは木の葉が幾層にも堆積して腐食してできた土なんだ。だから層の間に大量の空気の隙間ができている」

「なるほど、だから根が発達しやすいんだ」

「先生、こんな所にいましたか」

若い男が走ってきた。

「先生？」

ルークたちが一様に声を上げた。

「ねえ、この方はどこかの先生なの」

エリザベスが若い男に聞く。

「はい、帝都大学の農学の権威でございます」

「えっ、この方が……」

「そうそう、こんな話している暇がないだった」

若い男は慌てて話しかける。

「なんだね、私は忙しいんだが」

「先生、お忘れですか。今日は大学の教授会がある日です」

「なんだそんなもん、君が代わりに出てくれたまえ」

「私は教授会には出れません」

「うーん、めんどくさい」

「とにかく来てください」

ぼさぼさの頭をした男は、若い男に引つ張られていった。

エリザベスが、近代農業の父と呼ばれた男に出会った瞬間であった。

社交界に一切顔を出さなかった教授は、今までエリザベスと出会う機会がなかった。

この出会いは歴史的な一瞬であった。

この時、エリザベスの領内では、徐々に作物の収穫が減り始めていた。それが彼女の大きな悩みの一つであった。

これは一年おきの麦作で地力が尽きて、土の養分が枯れ果てていた結果であった。同じ作物をその場所で続けて栽培すると起きる、連作障害といわれる現象のためであった。

この後、教授の献策により連作障害を解消するための最適な作物  
『小麦 ジャガイモ 甜菜<sup>ビート</sup> 金時豆などの豆類』の四ローテーション  
制度を作っていく。

四ローテーションによって地力を復活させ、収穫高は二倍に増え  
たので庶民からは歓迎された。

さらに灌漑用水の整備、肥料の改良、農閑期に家畜を畑に放牧し  
糞の有効活用や森の葉っぱを腐らせて畑に鋤きこむなど各種の対策  
を立てていった。

十年後、これらの対策によりエリザベスの領内では、大幅に収穫  
量上げていくのであった。

## 第10話 避暑地

「しかし、無駄に暑いな、この城は」

「夏だから仕方がないですよ」

男二人がぐたつている。

「どうせ暑いなら、海のほうが良いなあ」

「そうですね、夏といえば海、海といえば水着、水着といえば美女、今一番熱いスポットそれが海ですよ」

「おう、よく分かつているじゃねえか」

男達二人は勝手に盛り上がっていた。

「お二人さん、折角だから行きますか、海へ」

今まで会話に加わるうともしなかつたエリザベスが、一枚の報告書をしげしげと眺めていたかと思つたら唐突に話しかけた。

二人がいた場所はエリザベスの執務室の一角にある応接セットであつた。

先ほどまで執務官がいたが、そそくさといなくなつていた。執務官たちも普段はグウタラだがやるときはやると分かつているのでルークたちを自由にさせていた。なによりも姫が自由にさせているのだから文句の言いようも無かつたが。

「ほんとうか」

「ええ、本当よ。しかも、とびつきりの砂浜にご招待するわ」

「やってきましたよ海ですよ」

「おう、一面に広がる砂浜、気持ちいいねえ」

澄み渡る空に遠くに入道雲が見え、真っ白な砂浜が続いていた。

着替えの早いルークと魔術師のエリックが一足先に浜辺に乗り出していた。

エリックは、すでにビーチパラソルを砂浜に差している。

「あら、二人とも早いわね」

水着に着替えたエリザベスがやってきた。彼女は薄手のパーカーを羽織っていた。

「さすが王族の別荘地だな」

「こんだけいい天気なのに誰もいないなんて、もしかして、ここすべて専用？」

「そうよ、王族専用のプライベートビーチ」

「さすが王族、豪勢だね」

「警備の関係もあってね。一般の人が一杯いる中で警備の人に周囲を囲まれて泳ぐのはちょっとね気が引けるし」

「そうだな夏場の海で、暴漢からの警備を完璧にするには、何百人警備を置いたらいいか分からないな。経費を考えたらこっちの方が良いか」

「へえ、王族専用と言うのも、色々考えられているんだ」

ルークたちの会話にエリックが感心していた。

「それに関係の無い人達が暗殺事件の巻き添えになっても可哀そうだしね。あの岬のところに見張り台があつて、そこからこっちには来れなくなっているわ。今日は特別に入れてあげたの。それと、もう一つサービスよ。浜辺に水着の美女がいないと寂しいでしょ」

エリザベスはロングのスプリングコートに身を包んだルネを彼らの目の前に連れ出した。

「本当にやるんですか」

華奢な肩を震わせていたルネが、哀願するようにエリザベスを見つめる。

エリザベスは無言で頷いた。

もう一度目で訴えるが、エリザベスの変わらぬ態度にルネはロングコートのボタンを襟元から外し始めた。ほっそりとしたその白い指で、一つ一つ、ゆっくりとボタンを外して行く。

目の前でいきなりコートを脱ぎ始めたルネを見て、ルークたちは

何が始まるのかと当惑と期待にゆれていた。

コートの襟が左右に大きく肌蹴はだけていき、しどけなく開いた隙間から、まばゆいばかりの白い谷間とまるやかな半乳が露になる。

すべてのボタンを外し終えたルネは、ためらいがちにコートの裾を引き寄せようと両端を掴もうとした。

「さあ、見せてあげなさい。あなたのナイスボディを」

エリザベスが後ろからコートをルネの肩からさっと抜き取る。

コートが上体をすべり、彼女のウエストを撫でて去っていった。

「ひっ、姫さま……」

「おおー」

眼前に広がる見事な曲線美に男たちはゴクリと生唾を呑んだ。

幼い顔立ちなのに、首から下のこぼれ落ちんばかりの見事な膨らみ、くびれたウエスト、瑞々しい太腿に二人の目は釘付けになった。

「あのう……やっぱりこの格好……」

驚いたことにルネは、布地のほとんど無いピンクのマイクロビキニを身に纏っていた。

彼女が恥じらいながら佇たたずむ姿は、甘えているような可愛らしい魅力が醸し出されている。

ルネは戸惑いを浮かべながら、ほとんど露あらわになっている身体をすばやく両腕を巻きつけて隠した。

右手で胸を、左手で下腹部を隠す、いわゆるヴィーナスポーズをして立っている。

透明感のある雪肌は羞恥でほんのりと紅潮して、柔らかそうな双乳はむにゆりと腕に押しつぶされ溢れだしている。

隠しているつもりが逆に官能的なボディラインをよりいっそう強調し、男達の劣情を誘っていた。

「今回はさらに特典付き」

「いったい、それは……」

男二人は期待の眼差しでエリザベスを見た。

「ルネに好きなポーズを三つまでさせて構いません。じゃあまずは、

殿方にあなたのナイスボディを見せてあげて、何のためにビキニラインのお手入れしたの」

「おお……」

扇情的な言葉に揺さぶられ、男たちは期待に喜悦の声を上げる。

「姫さまぁ……」

「さっ、手をどけて」

「うっ……」

声にならない声を上げ、逆らえないルネはゆっくりと腕を動かしていく。

白い砂浜の光の中に、あどけない容貌に引き締まったウエスト、均整のとれたプロポーションが浮かび上がった。

ふっくらと豊かに盛り上がった乳房の中央で、辛うじて隠すように三角形の布が乗っている。

身じろぎするたびに小さな布地が、波に翻弄される小船のように揺れている。

ボトムはTバックで、まろやかなヒップを余すところなく披露していた。

恥じらって上気させたコケティッシュな表情は、彼らを釘付けにして放さなかった。

「おおー、ちよつと作戦会議」

二人は少し離れてどのようなポーズにするか話し合っていた。

「それでは、発表します。第一番目のポーズ……」

男たちが色々と姿勢や手の位置、脚の置き方などを細かく注文していく。

「ルネさん、四つん這いになって」

「こうですか……」

「うん、それで少し上の方を見上げるように……」

手を触れんばかりに近くにある肩先は、滑らかで肌はミルクを溶かしたような白さをしていた。視線を下げると手足を動かすたびに、艶々した雪色の隆起が悩ましく揺れているのが窺える。

男達の野卑な視線に灼かれ、耳からうなじのあたりをルネは真っ赤に染めあげていく。

長い髪をかすかに揺すり、細く流麗な眉が切なげに析れ身悶えする姿は、いつそう男達の欲情を刺激した。

恥ずかしさで白い肌を桜色に染め、ルネはぎこちなく要請に応じていく。

「あなたは、あんまり見ないの」

ルネが男たちの前で四つん這いになり雌豹のポーズをしていると、エリザベスがルークの腕を引っ張って少し離れた場所に連れて行く。

「なんだよ」

ルネに熱中しているのを引き剥がされて不機嫌に答えた。

「あなたはいいの」

エリザベスが少しむくれた様に言った。

「どうして」

ルークは後ろ髪引かれる思いで、ルネの方を見続けている。

「どうしてもよ、それとも私に逆らう気？」

エリザベスがひと際強くルークの腕を脇に挟んで引き寄せた。

突如として、彼の動きが緩やかになってルネを見なくなった。

「そんなに言うなら……」

しぶしぶ従う振りをした。

ルークが大人おとなしくなったのには理由があった。

彼女はいつの間にかパーカーを脱ぎ去っていたのだった。

ルネに気をとられていたが、エリザベスの水着もなかなか際どいものであった。

彼女は黒のモノキニワンピースを纏まとい、脇から背中にかけてビキニと同じように肌がほとんど露出している。

ホルターネックから伸縮性のある太いタスキのような帯がバストを覆い、手の平ほどの幅の帯はヘソの下あたりで合わせり深いU字の切れ込みを作っている。

きわどく胸を覆う生地に豊かな連つらなりは押し出され、柔らかさそう

な横乳をまるび出していた。

つまり、ルークの腕にはエリザベスの柔らかな生乳が押し付けられ、彼はなんともいえない感触を堪能していたのであった。

「ところでさあ、ここまでサービスしてくれるってことは、タダではないよな」

「あら、分かったかしら」

「えっ、純粹に今までの慰労じゃないの……」

エリックがきよとんとして話しかけた。

「あほか、お前は、この姫がそんなに甘いやつか」

「うー、うー。その言われようは」

エリザベスが顔に手を当て泣いた振りをする。

「おい、目が笑っているぞ」

「ばれたか」

「とつとと本題に入ってくれ」

「じつは、ここから馬で二日くらい行った国境付近の森に二百人くらいの山賊が住んでいるの。けっこう近隣の町に被害が出ててね。

だけど、今の国際情勢は微妙でね、国境付近に大軍を派遣すると他国を刺激しかねないから、できないのよ」

「そこで俺たちの出番か。しかし、いくらなんでも三人は少なすぎないか」

「いや、四名で行くつもりよ。それに精鋭三十名の騎士に前から攻めてもらって、私達で裏から攻める予定なの」

「三人じゃなくて四人？」

「そう、四人、ルネを含めてよ」

「えっ……」

二人は見合わせた。

「知らなかったの彼女、私の護衛なのよ。騎士達があなた達みたいな怪しい人が私の回りに居ても何も言わないのはその為よ。彼女の腕はルーク程ではないけど、なかなかのものよ」

「こえー、騎士達に警戒されないのが不思議に思っている……」

「彼女の一番得意なのはナイフ、彼女の容姿から油断した相手を一瞬のうちに葬り去る。いわゆるナイフの居合いのようなものね。さらに投げナイフは百発百中よ」

「うお、最強の護衛じゃないですか」

「あなたたちが、もし、スケベ心を出してルネに襲い掛かっていたら、今頃あなた達はニューハーフになっていたかもしれないわね。あなたたちの大事なところ、ナイフで削ぎ取られているところよ」

「姫さま、私はそんなことしません」

ルネが顔を真っ赤にして恥じらいながら抗議していた。

なぜか男達は両手を股間に当て震えながらガードしていた。

## 第10話 避暑地（後書き）

ちなみに、ヴィーナスポーズはミロのヴィーナスではなく、ボツチチエリの『ヴィーナス誕生』のポーズです。

## 第11話 山賊

「うるせえ、いつまでも泣いてるんじゃないねえ」

男がすごんでみせた。

「この子をいじめないで」

強い目つきで、女が睨みかえしている。

「うっせい、このアマ、犯すぞこら」

「おい、商品に手を出すとお頭に殺されるぜ」

「あにきい、こいつをほつて置くのはちよつと」

「よし、生意気なやつにはお仕置きも必要か。触るだけならいいぜ」

「さっすが兄貴わかっつたら、楽しませてもらいますよ。うへへへへ」

男達の前には、薄布一枚を纏った様々な年齢の女達が手枷と足枷をつけられて座らされていた。

奴隷商に少しでも高く売りつけるため、いずれも扇情的な姿をさせられていた。

「お前も、その性格さえなければ、いい女なんだがなあ」

「くっ」

女は、男達の嘗め回すような視線に耐えていた。

その女は艶やかな髪、染み一つ無い白い肌、すつと通った鼻筋、引き結んだ瑞々しい唇、そしてきりりとした目をしていた。

彼女の凜とした整った顔つきを見て、きついと思うか美しいと思うかは好みの分かれるところだ。

男達を鋭く睨む瞳には、強い意志の光がある。

野卑な男達は、女の視線を真つ向から受けているにも拘らず、そのような視線に慣れてしているのか、たじろぐ素振りすら見せない。

男がにやりと顔を歪めて、彼女の身体に視線を這わしていく。

「兄貴、こんな極上のスケは初めてだぜ」

「そこいらへんの商売女とは違うぜ。本来は騎士様だからなあ。日頃の手入れが違うさ」

卑猥な会話と、全身をねつとりと舐めまわすような淫らな視線から避けるように、女騎士は身を傾<sup>かし</sup>げていた。

「あなた達、こんな事をしてどうい<sup>い</sup>つつもり。今すぐ縄を解きなさい」

必死に自由にならない身体を擦<sup>す</sup>って、目で牽制しようとするが、それもままならない。

彼女は山賊の襲った村の近辺を守護する砦にいた騎士であった。

彼女達守備隊が村に急行すると、村は多少のよそよそしさを感じられたが平穩であった。

様子を聞くために村長宅に寄ったとき、お茶を振舞われ皆で飲んだ。

この瞬間、彼女は意識を失ったのであった。

この時すでに村は山賊に制されており、毒入りのお茶を飲まされたのであった。

気がつく<sup>と</sup>二の腕も露わなシースルーのネグリジエに深紅のショーツを一枚身に着けただけで拘束されていた。

若い女たちは彼女と同様に拘束され、そのほかの者は殺されたようだ。村人達も同様のようだった。

「どうした、俺達には触られたくないか」

伸ばしてくる男の手を、女騎士は不自由な身ながら巧みに避けていた。

「ひいつ」

年かさの男がいきなり、先ほど泣いていた少女の首すじをつかむと、右腕を振りかぶり平手で薄い布地越しに、発達途中の臀部を打ちすえた。

少女の唇が驚きと突然の苦痛に歪んで短い叫びを吐く。

「いうことをきかなきゃ、こいつが痛いめにあうぜ。おとなしくしな」

張りのある肉体をしばく手応えに酔った男は、つづけざまに三回打撃を加える。

「ひいつ、いやっ、きゃあ……」

「わかりました、やめて、やめてください。言うとおりにしますから……」

大粒の涙と悲鳴を上げて身を震わせる少女を視界の片隅におさめると、女騎士は唇を噛みしめながらおとなしく胸を突き出した。

「おおっ」

期せずして二人の男の口から、唸り声にも似た驚嘆の声が洩れた。「体つきも抜群だぜ」

ドレスのように細い紐で肩から吊った形のその衣は、均整のとれたプロポーシヨンの彼女にぴったりとフィットしていた。

薄い布が肌に張り付き、身じろぎする度に揺れる豊かな連なりや、形を変えるまるやかな稜線を浮き立たせている。

あまりにも薄い布は、彼女の肌を浮かび上がらせたまま、臍の形や深紅のシヨーツの刺繍すらも透き通らせ、肌を隠す役目を完全に放棄していた。

透けて窺える彼女の官能的な姿態に、手下の男はズボンの下を隆起させつつあった。

女騎士は汚いものでも見るように、睨みつけた。

「まあ、そんな顔をしないでくれよ。きつい姉ちゃんだが、ここはなかなかいいパイオツじゃねえか」

手を伸ばせばすぐのところ展開されている豊熟した双球の膨らみに、男は涎を流さんばかりにしている。

欲情にしたがって男はその毛むくじゃらな無骨な手をさしのばすと、掌でその豊かな半球を周囲から刷くようにソフトタッチで触っていく。

それから円を描くようにゆっくりバスト全体を撫でていった。

柔らかく揺らされて、持ち主の意志とは関係なくなめらかな双乳はその形を変えていく。

「いやっ……ああっ……」

薄布の上から指の腹を中心の突起に当てて、少し強めに押さえながら円を描いていく。

転がすようにその硬さを確かめるようにじっくり弄なぶっていく。

「ひっ……」

「騎士様よ、こいつの手はなかなかだろう。もともとは娼館の調教師だからな。ちょっと喧嘩早いから首になっちまったけどな」

「兄貴、それは言わないでくれよ」

いかつい風貌に似合わず繊細な指遣いで、女の膨らみを捏ね回していくのであった。

女騎士の唇から漏れる拒否の言葉にも徐々に甘いモノが混ざりつつあった。

「おうおう、立ってきたぜ」

ごつい指の巧妙な刺激に、バラ色の突起がシースルーの布地を押し上げていく。

「ひあっ……駄目っ……」

おぞましい感覚に、美しい犠牲者は身をよじって逃げようとする。しかし背後の男が、そうはさせじとぐっと抱きとめ、弟分のほうへ女体を押しつけるのだった。

「どうだ、たっぷりいじってやんな」

「あ、兄貴。たまらないおっぱいだぜ……」

極上の感触に目をギラつかせ、執拗しつように円を描くようにバスト全体を撫でてこねまわす。

「それにどうだ、この柔らかさはよう、どこまでも指がめり込んでいきそうだぜ」

下から掬い上げるようにして、その重みを確かめながらゆっくりと指を食い込ませていく。

時折、母乳を絞り出すかのように縊り、その先端を弄くりまわす。

「む、むっ……」

苦悶の表情を浮かべる女の姿を、男達は堪能していた。

抵抗しようにも、背後から強い力で抱きすくめられ、二の腕をがっしり押さえられていた。

彼女は歯を喰いしぼり耐えていたが、そのおぞましくも淫らな責めにいつしか呻きが、喘ぎに変わりはじめていった。

「火事だー、急いで消火しろ」

「いや、襲撃だー」

外がいきなり嵐のような喧騒に包まれ始めた。

「どうなっているんだ」

「兄貴、どうしたんだろっ」

## 第12話 山賊2

「手筈通りでいいんだな」

ルークが確認した。

「いいわよ、最初にエリックが魔法でランダムに火球を落す。その後、騎士が前から突入。前面に注意がいつている時に、私達が裏から侵入、攫われた人達の救助及び後方攪乱よ」

エリザベスが答える。

「エリック、じゃあやっちゃってくれ」

「了解、風よ……」

エリックが唱えると、空気の流れが変わった。彼の周りに風が纏わりつくように集まり始めた。

ふわっと彼の身体が浮いたと思ったら、一気に上空まで昇っていた。

ひとときわ高い杉の木と同じ高さまであがると、両手の上に十数個の火球を浮かべた。

「ほらっ」と手のひらを反すと、ふわふわと浮いていた拳大の火球が、勢いよく落ちていった。

地表ではぶつかった轟音とともに、建物が燃え始めた。

「もう一丁」

エリックが第二段の火球を用意して、落としていった。

地表では大混乱が続いていた。

火を消し止めに行く者、敵だと叫んで走り回る者、右往左往する者など元々アウトローの山賊なのでこのような場面で統制が取れた行動をすることは難しかった。

「破城鎚用意、城門へ打ちつける」

先端に金属を被せ補強した丸太からヒモが四本延びているものをそれぞれ騎士が一本ずつ吊り下げている。合図とともに走りこんで

鐘を突くように手を振ると一斉に手を放した。

騎士たちは身体の強化魔法を使っているのか、ものすごい勢いで城門に破城鎚が突き刺さっていく。

轟音とともに門が崩れさった。

「一気に突入」

「はっ」

それぞれの小隊が、三方に分かれて突入していった。

「そいつは、私に渡してもらおうか」

ルークは賊を取り押さえようと後ろ手に縛っていたところ、不審な女兵士が横から槍を出してきた。

「なんだ、おまえは」

よく見ると、不思議な格好をしていた。

下半身には布切れを腰に巻いただけで、上半身はブカブカの皮鎧を身に着けている。胸元や脇からまるやかな半球が窺え、真っ白な太腿が惜しげもなく晒さらされていた。

「こいつは、私があの子に送ってあげるわ」

「ひっ……」

山賊は声にならない恐怖を感じ、震えていた。この男は先ほどまで女騎士を黽こつていた者だ。

「この男だけは、許さない。邪魔するならあんたも……」

女兵士はものすごい形相で、いきなり槍をルークに向けて差し込んできた。

「あぶね」

ルークの目の前、指一本分のところに槍の刃が通り過ぎていった。

「さあ、あんたはこの男をここに置いて、とっとと帰んな」

今度は猛烈な旋風を起こしながら、横薙ぎしてきた。

「うお」

ルークは慌てて剣で受ける。

両者の剣戟が物凄い音となって響いている。

「おいおい、俺は敵じゃないぜ」

「私の邪魔をするものは、誰でも一緒だ。このくさった男は、私が始末をする」

「そうは言っても、もう縄をかけているんだぜ」

「なんと言おうと、先に言った言葉を変えるつもりはない」

「うわっ」

鋭い突きが打ち込まれる。

「やめろって」

ルークが剣で避けながら、説得を試みる。そう言っている間にも数合打ち合っている。

「問答無用」

「あちやー、なに言っても無駄か」

ルークは相手の槍の攻撃を、剣を使って巧みに逸<sup>そ</sup>らしている。

するどい槍の突きを紙一重でかわすと、詰め寄ろうと彼が一步踏み込んだ。

石突（槍の尻の部分）が、すかさず下から振り上げられた。

彼は身体を仰け反らせてかわす。

風圧で髪の毛が逆立った。

息をつく暇のない攻防が続く。

「ねえ、あれなに」

「さあ、本人達に聞いてみたほうが」

エリザベスとエリックがやって来たら、息つく暇のない攻防が繰り広げられていた。

「あの女兵士は、ルークと互角に戦っているわね」

「まあ、ルークの方が相手を傷つけないように気を使っているようですけど」

「そうは言っても、ルークが押されているのなんて始めて見たわよ」  
「そう言われてみれば」

「ねっ、何とかならないかしら。傷つけないようにあの女兵士を何とかしてよ」

「また、さらりと難しいことを言ってくれますね」

女兵士は当初の目的を忘れたのか、野盗の横を通り過ぎたが一べつもしなかった。ルークを倒すことに集中しているようだ。もはや彼女の怒りの矛先は完全にルークに向けられていた。

空気を切り裂くような一撃が容赦なくルークに向かっていく。ルークは巧みに剣で力を逸らしながらかわすと、一步踏み込んで槍のもち手を狙って剣を繰り出した。

女兵士は手をスライドさせると、そのまま槍先を回転させルークの頭を刺しに行く。

ルークの視線は真剣そのものだ。一瞬の油断が死につながる。息を継ぐ暇のない攻防を繰り返していた。

「ルーク」

エリックが叫んだ。

ルークは一べつつすると、いきなりエリックに向けて走り始めた。

女兵士はルークを追って走る。

ルークがいきなり飛んだ。

女兵士がいきなり見えなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2733p/>

---

冒険者と姫の物語

2011年11月22日03時15分発行